

# 古文字學研究文獻提要

今號の「古文字學論著目」の日文書の部を見てわかるように、二〇一四年はこの分野の單著が多く刊行された。特に目立つのは、若手研究者による博士論文である。分野も甲骨文・金文・戰國秦漢竹簡とバランスよく揃っている。そこで今回はこれらの書五篇を取り上げることにした。

## 陳捷著『甲骨文字と商代の信仰 神權・王權と文化』（京都大學學術出版會、二〇一四年三月）

本書は著者陳捷氏が二〇〇八年三月に京都大學大學院人間・環境學研究科より學位を授與された博士論文に加筆したものであり、甲骨卜辭を主な史料として商代の占卜について論じている。

緒論では、これまでの甲骨學の歩みを確認したうえで、本書の目的や構想について述べる。商代における信仰について、断片的な個別研究はなされてきたものの、文化史の立場からの全面的な研究は未だ不十分であり、解明すべき問題が多く残されているとし、第一部では甲骨の諸相、第二部では甲骨卜辭中の卜兆の吉凶の判断を記した部分である固辭の分析及び巫祝長としての商王の役割、第三部では占卜の結

果について記す驗辭の特徴とその變移と行った具合に、三つの研究課題を設定する。

第一部「商代信仰世界における甲骨の諸相」は第一章から第四章までとなる。第一章『尚書』洪範に見える商代の卜筮では、傳世文獻、特に『尚書』洪範に注目し、卜筮について記した「稽疑」の部分を商代の卜筮に關する貴重な史料と評價する。

第二章「卜の特徴」では、商代に卜が行われた時間・場所・方法について検討する。

第三章「筮の記録」では、商代の筮について検討する。甲骨文に見える數字卦とされるものを筮と位置づけ、商代には卜と筮が並行して行われていたとする。それらの數字卦は『周易』の卦とは別系統のものであり、『周易』『連山』とともに三易に數えられ、鄭玄が商代の易と位置づける『歸藏』にあたるものであるとする。『歸藏』については傳世文獻の中に佚文が見られるほか、出土文獻である江陵王家臺秦簡にも『歸藏』とされるものがあり、本書ではこれを商代の『歸藏』の一部であるとす。

第四章「卜と筮の關係」では、占いの手段としての卜と筮の比較を

行い、共通點・相違點を挙げ、卜と筮、また卜の中でも龜卜と骨卜とはルーツが異なっていたが、商民族が龜卜と骨卜を結合させ、更に筮法を取り入れて改良し、卜と筮をその信仰世界の二本柱としたとする。

第二部「甲骨文字に見える商王の權威―固辭の變遷を中心に」は第五章から第七章までとなる。特に第五章「固・凵」字の解讀について」が本書の核心部分となる。本書では従来「占辭」「繇辭」などと呼ばれていた、甲骨卜辭中の主に商王による卜兆の吉凶の判断を記録した部分を「固辭」と呼び換えている。そして「固辭」の冒頭部「王固曰」の「固・凵」字の字釋については、諸説を「占」字説、「呬・凵・稽」字説、その他の三種にまとめ、字義・字形・字音の三つの観点から検討する。まず字義については、特に従來の「占」字説について、甲骨文に別に「占」字が存在し、「固」字と意味や使い方が異なるようであるとして否定したうえで、甲骨文の「王固曰」は『尚書』盤庚上に見える「卜稽曰」と同じ構文であり、「固・凵」字を「稽」字と見なして問題なく、『說文解字』卷三下・卜部で「讀與稽同」とする「呬」字も、やはり「稽」字と同音・同義の文字と見て差し支えないとする。字形については、「固」字は陳夢家の卜骨の象形とする説が最も合理的であるとし、この字はひび割れが生じた骨を示す「囧」と、豫測・豫言を示す「口」から成るとする。そして「固」字は第一期から第五期にかけて「凵」字へと變化していくが、『玉篇』や『汗簡』『古文四聲韻』などに「稽」の古文として見える「凵」や「呬」はそこから派生した字形であり、「稽」はその假借字であるとすると。字音については、「固」の部分の意味とともに發音をも示し、「憂」と同音で讀み、

「稽」と音通するとする。

第六章「固辭の性格とその變遷」では、甲骨上で固辭が刻まれる位置や時期ごとの變遷について論じている。固辭を含む卜辭の中で、第一期のものが半数以上を占め、内容・形式ともに豊富で固辭の最盛期にあたるとする。ところが第二期から第四期にかけてのものはごくわずかの數量しか確認されず、内容・形式とも簡略化がめだち、固辭の沈滞期とする。第五期のものは再び數量が増加するが、卜兆の判定は「吉」「大吉」「引吉」の三種類のみで凶兆を見出したものが存在せず、極度に形式化し、固辭の泡沫期にあたるとする。

第七章「商王權威の變化」では、前章で扱った固辭の變遷の原因について、主として傳世文獻を史料として検討する。商王朝は、王が政治指導者としてのみならず巫祝長の役割も兼ねる体制であり、第一期が固辭の全盛期となったのは、武丁がすぐれた巫祝長であったことを示すとする。しかしおそらく王位繼承の混亂や短命の王が相次いだことにより、第二期以後商王は占卜にあまり關與しないようになる。そして王の權威を示す巫祝長としての役割を十分に果たせなくなったことが、神權政治を根本とする商王朝の終焉へとつながっていったと結論づける。

第三部「信仰と共に展開する商代の文化―驗辭とその周邊」は、第八章「移り變わってゆく驗辭」のみとなり、占卜の後に起こった事實と吉凶判断との照合の部分にあたる驗辭の變遷について検討する。驗辭を含む卜辭のうち、第一期のものが半数以上を占め、その内容は祭祀・征伐など多岐にわたる。第二期以降は數量が激減し、内容も第二

期は氣象に關するもの、第三期は田獵に關するものが大半を占め、形式は簡畧なものが多くなる。第五期については、内容は第三期の傾向を引き継ぎ、田獵に關するものとみとなる。このような驗辭の變化は固辭の變化と連動したものであるとする。また固辭が記されず直接驗辭を記す卜辭が相當數存在するが、これは王族の子・卜官・貞人など王以外の人物が卜兆の判定を行っていたこと、そしてこれが制度化されていたことを示唆するものであるとし、第五期にはこの占卜事業が高度に制度化される一方で、形式化・空洞化も進行したとする。

なお、本書については、筆者（佐藤）による書評（『日本秦漢史研究』第一六號、二〇一五年一月）がある。（佐藤信弥）

## 角道亮介著『西周王朝とその青銅器』（六一書房、二〇一四年三月）

「後記」によると、本書は著者が二〇一二年三月に東京大學大学院人文社會系研究科に提出した博士學位論文に加筆・修正を加えたものである。本文は全五章から成る。筆者の専攻は中國考古學であり、本書でも器物としての西周青銅器を主要な検討材料としているが、金文に見える事象に關しても重要な指摘を行っている。

「第一章 西周史研究の意義と課題」は、本書の序論にあたる部分である。

「第一節 文獻資料に記載される西周史」は、まず『史記』周本紀によって周王朝の成立から東遷までを概観する。そして従来なされてきたような、出土資料を文獻資料の記述が眞であることを證明するた

めに用いる手法を批判し、二種の資料を總合した新たな西周史研究の必要を説く。

「第二節 西周史研究と問題の所在」は、これまでの先周・西周の遺跡や青銅器研究について概観し、本書の目的は青銅彝器が反映する祭祀體系への検討を通じてその面的な廣がりを検討するとともに、西周王朝の政治體としての實態を解明することにあるとし、特に青銅器銘文の内容と器物本體、及び器物を使用した祭祀行為との關連に着目していくとする。

「第二章 西周青銅器の廣がり」は、西周王朝の廣がりを見ていくための基礎作業として、青銅彝器の編年形式を行い、ついで青銅彝器の出土地點からその分布範圍を明確化し、最後に青銅器文化圏の設定を行っている。

「第一節 西周青銅器編年の枠組み」は、青銅彝器の地域的な廣がりや王朝系・地方型の別を論じるための基準を定めるために、周原遺跡羣出土の青銅鼎を對象として編年を設定している。特に形制の面で西周中期後段から後期前段の間に大きな變革があったことが見て取れ、その背景として青銅鼎を使用した祭祀行動の變化を想定する。

「第二節 西周期の青銅彝器分布」は、陝西省の周原・豐鎬をはじめとする各省の各地點ごとに出土した西周青銅彝器を概観する。

「第三節 西周期の青銅器文化圏」は、前節での検討をふまへ、西周時代の青銅彝器の分布域を、西周青銅器文化圏（陝西・河南・山西を中心とする黄河下流域と河北省・湖北省を含む地域）、華東青銅器文化圏（安徽省南部・江蘇省南部と浙江省の一部）、湘贛青銅器文化

圈（湖南省・江西省と浙江省の一部）に大きく三分し、邊緣地域として遼西地域、嶺南地域を設定する。そして西周時代を通じて青銅彝器分布の中心となったのは、西周青銅器文化圏に屬する陝西省關中平原と山西省臨汾盆地であり、西周中期には分布域が縮小し、後期には再び分布域が廣がるといった動きが見られると指摘する。

「第三章 西周王朝と青銅器」は、西周王朝の中心地域である關中平原での青銅彝器の分布や使用法、それに付随して王畿の範圍や王朝の都の性格について論じる。本章第二節で検討される窖藏の用途と、第三節で検討される宗周の位置比定は、本書の中でも特に重要な指摘である。

「第一節 關中平原における青銅彝器分布の變化」は、關中平原の諸地域を秦嶺北麓東部・岐山南麓地域など十二に分けて青銅彝器の出土状況を確認する。殷末周初から西周前期にかけては關中平原地域各地の廣い範圍で出土するのに對し、中期から後期にかけては、周原地區や豐鎬地區を含む岐山南麓地域と渭河兩岸地域に出土が集中し、西周時代を通じて分布に變化がないこの二つを中心とする地域が西周王朝の王畿であったこと、王畿内の各邑では王朝が青銅彝器による祭祀を一括管理していたことなどを指摘する。

「第二節 青銅器祭祀の變革とその背景」は、西周後期の周原・豐鎬地區で集中的に設けられた青銅彝器窖藏について論じる。従來は諸氏族が厲王の出走や東遷などの混亂から逃れる際に、一時的に青銅器を隠すために設置したとされてきたが、西周後期に墓地への青銅彝器の副葬が見られなくなること、窖藏の周邊にしばしば宗廟と見られる

建築遺構が見られることなどを根據に、窖藏は宗廟に併設された青銅彝器の恆常的な保管庫であったとする。そして西周中期後段から後期前段にかけての王朝による禮制改革の一環として、祖先祭祀に用いる青銅彝器の墓地への副葬を禁じ、宗廟で繰り返し使用させるという規制が存在したと想定する。

「第三節 周原と宗周」は、前節での検討により明らかとなった祭祀都市としての周原と、金文に見える宗周・成周・葦京・周といった西周王朝の都の性質とを比較する。特に従來鎬京と同一視されることが多かった宗周について、祭祀の中心地としての性格が周原遺跡と一致することから、陳夢家の宗周岐山説を再評價し、鎬京ではなく周原を指すとし、周は宗周すなわち周原の畧稱とする。また議論が多い葦京も王孟の出土地點などを根據に周原遺跡羣内に位置したとする。

「第四章 諸侯國における受容形態」は、諸侯國地域での青銅彝器の出土状況を検討し、青銅彝器による西周王朝の禮制の受容の度合いを分析する。

「第一節 晉國墓地の研究」は、西周諸侯墓のうち發掘によってその全體像の把握が可能な事例として、山西北趙趙晉侯墓地を取り上げる。著者はロシアの Kryukov（劉克甫）の見解を承け、墓地より出土する青銅彝器銘に見える晉侯名と『史記』晉本紀に見える晉侯名との比定を中心とする従來の墓地の編年を批判し、出土青銅鼎の形式の検討から、従來とは異なる墓地の編年案を提示する。そして前章で問題にしたような青銅器窖藏は當地では發見されておらず、西周後期になっても青銅彝器を墓地に副葬していることから、中期後段以降の王朝によ

る禮制改革は受け入れられていなかったとする。

「第二節 強國墓地の研究」は、同様に發掘によってその全體像の把握が可能な事例として、陝西寶鷄強國墓地を取り上げる。墓地副葬の青銅器は王朝系青銅彝器、強集團の出自に關係する四川系の三角援戈や尖底罐、そして在地系の柳葉形短劍・平底罐の三種に分けられるが、時期を経るにつれ王朝系の割合が増加し、支配層が自らの權威強化のため、王朝の禮制を取り入れようとしたことが読み取れるとする。出土青銅彝器の銘文に見える王朝の有力氏族井氏との婚姻もこれに連動する動きであるとする。

「第三節 西周青銅器銘文に見える禮制の受容」は、諸侯國での青銅彝器を利用した祭祀活動の執行や王朝の禮制の受容を探る。まず青銅彝器そのものの分布は廣範圍にわたり、西周後期に酒器にかわって水器・樂器が増加するなど、青銅彝器の組成も黃河流域の諸侯國では王朝の方針と一致している。一方で銘文の作器對象や敘述形式に着目して定量的に分析すると、西周前・中期には永續的な使用を期待されるものや、作器者と王朝との關係について記した銘文を持つ青銅彝器を墓地に副葬しないという王朝の規制が、一部例外を除いて諸侯國でも守られており、これら祭祀行爲の共通する諸侯國が王畿とともに西周王朝の政治的な領域を構成していたと見る。しかし西周後期には諸侯の自作器が増加するなど、王朝の定めた規範からの逸脱が見られ、諸侯國が独自の青銅器祭祀を試みていたことが読み取れるとする。

「第五章 西周の政體と領域」は、本書の結論部分である。前四章での検討を振り返り、本書で指摘したような青銅彝器の副葬規制を合

む西周中期後段・後期前段間の禮制改革は、第四章第三節で言及されたような、青銅彝器による祭祀行爲の獨自化をはかる諸侯國の牽制と、そして服屬諸氏族の再編成が目的であったと思われるが、第二章第二節で見た晉國の事例のように、西周王朝の意圖が受け入れられたとは言いがたく、禮制改革の失敗が西周の滅亡を決定づけたとする。そして西周王朝の政治的領域がかなり限定的であるのに對して、その青銅彝器の分布範圍は廣大であるが、器物としての青銅彝器の受容を通じて禮というシステムの存在を知り得た地域が、春秋期以降に『中華』世界を形成していくという見通しを提示する。

冒頭にも觸れたように著者は本來中國考古學を専門としているが、以上の紹介で窺えるように、青銅彝器に付隨する金文も資料として積極的に利用している。特に第四章第一節で晉侯墓地出土器銘に見える晉侯名を安易に『史記』晉世家に見える晉侯名に比定する行爲を批判するなど、文字資料に對する視點も確かである。考古學と金文學との融合が高い水準で達成された研究と位置づけられよう。

ただ、本書は周王朝と青銅彝器・銘文との關係について、青銅彝器が基本的に王室の工房で製作されていたとするなどの、『西周青銅器とその國家』（東京大學出版會、東京、一九八〇年）に見える松丸道雄氏の諸論を前提として議論を展開しているが、この點に關しては評價が分かれるところであろう。

なお、本書に關しては、飯島武次氏（『季刊考古學』第一二九號、二〇一四年一月）、内田純子氏（『考古學研究』第六一卷第三號、二〇一四年二月）、丹羽崇史氏（『中國出土資料研究』第一九號、

二〇一五年三月）らによる書評・紹介が既に発表されている。

（佐藤信弥）

佐藤信弥著『西周期における祭祀儀禮の研究』（朋友書店、二〇一四年三月）

本書は佐藤信弥氏が博士學位論文に加筆修正を施したものであり、西周期における祭祀儀禮の消長・變遷の様相とその背景を探ることを目的とする。本書の構成は次の通りである。

序論 西周祭祀儀禮研究における二つの問題

第1章 獻捷儀禮の變化

第2章 祭祀儀禮の場の變化（一）荅京

第3章 祭祀儀禮の場の變化（二）周新宮

第4章 祭祀儀禮の参加者と賜與品の變化

第5章 蔑歴の時代

第6章 册命儀禮の形式とその確立

終章 東遷以後の周王朝とその儀禮

序論では、先秦史の研究の際に利用される二重證據法（「第1節 西周祭祀儀禮研究と二重證據法」と文化人類學的手法（第2節 西周祭祀儀禮研究と文化人類學的手法））について取り上げ、それらの注意點・問題點などを述べる。そして、西周期の中での儀禮の變化については歴史學的な視點から追う必要があるという。第3節では本書の構成について述べる。

第1章では、戰勝後に主君や祖靈に對して俘虜・敵首などの戰果を

報告し、獻上する儀禮である獻捷儀禮について考察する。

「第1節 獻捷儀禮の概要」では小孟鼎を例として、高智群の先行研究の區分に依りながらその儀節を確認する。

「第2節 西周前・中期の獻捷儀禮」「（1）獻捷儀禮中の燎祭」では、西周金文や傳世文獻に見える燎祭の淵源は、殷代に田獵・巡察のような軍事的行動に伴って行われた燎にあることを指摘する。「（2）獻捷儀禮中の鬯祭」では、西周期の鬯祭は燎祭の場合よりも直接的に殷代の鬯を淵源としていたという。「（3）周王主催の祭祀について」では、西周金文に見える祭祀について検討し、周王の主催による祭祀が施行された時期はおおむね西周中期までに限定され、特に西周前期に盛行したことがわかるという。

「第3節 西周後期・春秋期の獻捷儀禮」「（1）貢納としての獻捷儀禮」では、獻捷儀禮を検討し、西周後期においては報功と賞賜の儀節のみが重視されるようになり、燎祭のような祭祀は廢れていったという。「（2）廷禮の形式による儀禮」では、册命儀禮に主として見られる儀禮の形式である廷禮を確認する。西周後期において、獻捷儀禮が貢納の儀禮としての性質を強め、獻捷及びその賞賜の儀禮が廷禮の形式に沿って整備されていたことは、册命儀禮の盛行と對應した現象なのではないかと考える。

第2章では、周王朝の中心の一つである荅京について、その京としての意義、西周後期に至って京としての地位を喪失する経緯などを考察する。

「第1節 荅京の位相」「（1）荅京の地望」では、荅京の地望につ

いて先行研究を検討し、新たな発見がない限り、西安市付近一帯に位置したとする説が妥当であるという。「(2) 葦京から葦へ」では、葦京の辟雍施設で行われた儀禮の用例を挙げる。また、西周前期から中期にかけては辟雍施設において王朝の大典としての大禮や漁禮が盛んに行われていたが、後期になると、葦京は単に葦と呼ばれるようになり、周王の滞在地のひとつ、あるいは貴族の宮室の造營地にすぎなくなっていくという経過を明らかにする。「(3) 周の京について」では、西周金文に見える京は、地名に關わるものと、京宮・京室など宮室の名稱の二種類に分けられるといい、それらの用例の検討を行う。また、京と葦京の關係についても言及する。

「第2節 周康宮の經營と葦」では、冊命儀禮の主要な施行の場となったのが周所在の諸宮であるという。その諸宮の一つである周康宮について検討し、周王朝は西周中期後半以後、葦京のような宗教的中心地に替えて、周康宮のような政治的・經濟的な中心地の構築を切實に必要とするようになったことを指摘する。

第3章では、祭祀儀禮の轉換期に、儀禮の場として重要な役割を果たした周新宮について考察する。

「第1節 周新宮の用例」では、金文における周新宮の基本的な事項を確認し、その使用期間は西周中期後半から西周後期前半にかけての時期に相當するという。

「第2節 西周中期における儀禮の變遷と周新宮」では、周新宮で施行された射禮と冊命儀禮について検討する。そして、周新宮は「會同型儀禮」(「臣」下が周王あるいは周王により施行を命じられた貴族の

もとに一堂に會する型の儀禮)から冊命儀禮という、西周中期後半の儀禮の變化に對應する役割を擔っていたと考える。

「第3節 西周後期における周新宮」では、西周後期の「周新宮」と「周康宮新宮」について考察し、周新宮のすべての用例が「周康宮新宮」の略稱であると見る必要はないという。西周後期、新宮は周王の據點としての地位を康宮に譲り、その重要性が薄れたことにより、康宮の統屬下に入ったと考える。

第4章では、「會同型儀禮」と冊命儀禮の参加者と賜與品を比較検討し、「會同型儀禮」から冊命儀禮への變遷の跡を探る。

「第1節 會同型儀禮の分析」及び「第2節 冊命儀禮の分析」では、それぞれの儀禮の(1) 参加者、(2) 賜與品を分析し、祭祀儀禮の變遷にともない、儀禮の場で賜與される品物も、その儀禮の性質に合ったものへと變化していったという。

第5章では、清代より現代に至るまで、長らく定解が得られなかった西周金文中に類見する蔑曆(蔑歴)(筆者注:以下、「蔑歴」と略す)の語意とその關連する問題について考察を行う。

「第1節 蔑歴とは何か」では、金文に見える蔑歴の用例を検討し、それは上司が賞賜に伴って部下や家臣の功績を、その父祖の事績と關係づけて褒賞し、君臣關係を確認する儀節であり、そのような行爲を集約した文書用語であったと指摘する。

「第2節 類似の語句」では、蔑歴と類似する意味を持つ語句について確認する。その語句は蔑字單用の例を除き、現在のところ、「加(嘉)某曆(歴)」「光某[事]」「婪[皇某[身]」「加(嘉)某義(儀)」「滅

宓某「身」「裘宓某」の六種類存在することがわかり、これらは蔑歴とは異なり、當人の事績のみを稱えることを示すという。

「第3節 斷代の問題」では、蔑歴の語が西周中期を境に用例数が急減し、東周金文や傳世文獻には一例も見られないという問題を考察する。西周中期の金文に蔑歴が頻見する理由は、この時期は文王・武王から相當の世代を経ており、君臣關係を再確認していく必要性が強くなってきたが、それを記録として残す際に、西周後期とは異なってまだ記述が簡潔な金文が主流であったために、「蔑歴（蔑歴）」の語を必要としていたためであると考える。

第6章では、冊命儀禮の確立・形式化の過程とその背景について検討する。

「第1節 任命儀禮の種類と形式」(1) 冊命儀禮の形式」では、冊命儀禮の儀節を、頌鼎／簋／壺を例に確認する。(2) 冊命以外の任命儀式」では、冊命儀禮ではない任命儀式の形式である克鐘／鐃の銘文を確認し、それは例外的な措置であったと考える。

「第2節 西周前・中期の任命」では、冊命金文が盛行する以前の時期の官職・職事の任命を記述する大孟鼎について検討し、この銘の任命の持つ意義が冊命儀禮のそれと同質であったかどうかは疑問であるという。また、大孟鼎より一段階時期が下る班簋にも言及する。

「第3節 西周中・後期の任命」(1) 冊命儀禮確立の過程」では、西周中期に冊命儀禮の儀節が整えられていく過程を反映した史料を確認する。そして、冊命儀禮とは周王が公より下位の身分の貴族を任命の対象とするためにつくられた任命儀式の一形式であると位置づけ

る。(2) 右者の役割について」では、冊命儀禮の右者の果たした役割について検討する。誘導の形式という點に着目すれば、冊命儀禮の受命者と右者との關係は、統屬關係にある、もしくは冊命がきっかけで統屬關係が結ばれることを示していると考ええる。(3) 「邦君」への任命」では、西周中期後半以後の「邦君」に對する官職・職事の任命の形式について考察する。西周中期以後、冊命儀禮が確立・形式化される一方で、公のような高位の貴族を任命する際には、冊命儀禮の儀節に逐一則ることは必ずしも重視されなかったと考える。

終章の「第1節 西周期における祭祀儀禮の展開とその背景」では、これまでの各章をまとめ、西周中期後半の冊命儀禮の確立・盛行を畫期として見た場合の祭祀儀禮の様相と背景について、西周前・中期前半(武王期)・穆王前後)と西周中期後半・後期(共王期前後)・幽王期)に分けて整理する。

「第2節 西周以來の儀禮の繼承」では、春秋期における周王主催の儀禮の施行について、西周金文と儀禮の形式が類似する傳世文獻の事例について確認する。

「第3節 子犯鐘の時代」では、春秋期の金文である子犯鐘の検討を行う。春秋期には「諸侯」やその家臣たちが自らを西周期の家臣になぞらえ、周王になお一定の權威を認める一方で、それを自らの權威化に利用していた可能性を指摘する。

「第4節 周王朝による賜命禮の施行」では、周王は「諸侯」のもとに使者を派遣し誥命を傳える賜命禮を施行して「諸侯」に對する影響力を強めようとしていたという。この賜命禮は策命(冊命)儀禮か

ら派生した新しい儀禮と見るべきであると考ええる。

本節の最後では、戦國期に中原の「諸侯」が稱王するのは、その勢力の擴大とともに、自らを周王になぞらえるようになったことがその一因であるという。「諸侯」らの意識の變化と連動して、西周期以来の儀禮を含めた禮制も變容を迫られることになり、このような戦國期の人々の意識に合った禮制のテキストとして著述されたのが『禮記』『周禮』『儀禮』といった禮文獻であったと展望を述べている。

本書では、序論で二重證據法等の問題點や注意點について章を割いて言及するように、西周金文を主要な史料として、西周期の祭祀儀禮を考察する。西周金文を用いて研究を行う際、儀禮は必ず何らかの形で関わってくることになる。本書は先秦時期の儀禮を研究するためだけでなく、西周史研究を行っていく上での一助となるであろう。

(三輪健介)

## 西信康著『郭店楚簡『五行』と傳世文獻』(北海道大學出版會、二〇一四年三月)

郭店楚簡『五行』を中心とした研究成果を収載した書。第一章「郭店楚簡『五行』研究史と課題」、第二章「郭店楚簡『五行』第一段目の思想と構造」、第三章「郭店楚簡『五行』第二段目の思想と構造」、第四章「郭店楚簡『五行』第三段目の思想と構造」、第五章「『孟子』萬章下篇「金聲而玉振之」考」、第六章「『孟子』に見える告子の仁内義外説」、第七章「郭店楚簡『性自命出』の人性論とその周邊」の全七章で構成されている。第一章から第五章は著者の博士學位論文(郭

店楚簡『五行』の研究)、二〇〇九年、北海道大學に提出、第六章・

第七章はその後に發表された個別的な研究成果であり、本書収録に当たって大幅な修訂が加えられている。郭店楚簡『五行』のみならず、馬王堆帛書『五行』や郭店楚簡『六德』『語叢一』『性自命出』などの出土資料や關連する傳世文獻をも研究對象とし、それぞれの思想内容とその特徴を明らかにしている。本書において著者は、出土資料の讀解に際して、「それぞれの文獻の獨自性が確保されず、他文獻の解釋がそのまま無批判に適用されるという方法論上の問題」があることを指摘し、本書に収録されている論文はすべてこの問題意識に基づいて考察されている。

第一章から第四章は、郭店楚簡『五行』を研究對象とし、その思想と構造を明らかにしている。その際、特に、竹簡上に見える墨節符號(一)に注目している。

第一章「郭店楚簡『五行』研究史と課題」では、馬王堆帛書『五行』と郭店楚簡『五行』をめぐる研究史を概説し、その問題點と課題を提示している。一九七三年に湖南省長沙市で發見された馬王堆帛書の『五行』と、一九九三年に湖北省荊門市で發見された郭店楚簡の『五行』とは、ほぼ同内容の文獻であるが、馬王堆帛書『五行』が《經》とその解説である《說》で構成されている一方、郭店楚簡『五行』は《經》のみしか存在しない。しかし、先行研究では、馬王堆帛書『五行』の《說》に従って郭店楚簡『五行』も讀まれている傾向があり、郭店楚簡『五行』を一つの獨立した文獻として解釋されているとは言いがたい状況であるとされる。そこで本書では、郭店楚簡『五行』と馬王堆

帛書『五行』とは別文獻であることを今一度確認し、その獨立性を認めた上で、改めてその思想を把握するという意圖のもとで検討が加えられる。

第二章「郭店楚簡『五行』第一段目の思想と構造」では、まず、郭店楚簡『五行』に見える墨節符號（■）に基づいて、第一章から第七章前半を第一段目、第七章後半から第二章を第二段目、第二章から第八章を第三段目と、全體を三つに區分している。次に、第一段目の間の各章節同士の構造的な繋がりを確認しつつ、その思想内容を明らかにしている。特に、これまで様々な解釋が提示されてきた「形於内（内に形はる）」の讀解を契機に、第一段目には「仁」「智」「聖」の徳を視覚的聽覺的對象として「形はす」という専心内形論と稱すべき思想が見出せると述べる。そして、第一段目は、章節同士の構造的な繋がりがだけでなく、思想的に一貫性が窺えることを指摘している。

第三章「郭店楚簡『五行』第二段目の思想と構造」では、第二段目に見える墨釘符號（■）に注目し、特に第十八章と第二〇章との間には章節同士の強固な繋がりと述べる。また、思想的特徴として、「見て之れを知るは、智なり。聞きて之れを知るは聖なり」（郭店楚簡『五行』第四章）の部分から聖智論が見出せる一方、第一段目でしばしば言及されている「形はる」という言葉が第二段目には見えないことから、第一段目と第二段目とは墨節符號（■）で分けられ、それぞれ独自の思想的主題が存していると指摘する。

第四章「郭店楚簡『五行』第三段目の思想と構造」では、第一段目・第二段目とは異なり、第三段目には同じ概念を共有する章節がほとん

どなく、構造的にも思想的にもまとまりに缺けると指摘している。

以上の成果を踏まえ、第一段目の専心内形論と第二段目の聖智論とを関連づけ、それを一つにまとめ上げていることこそが、郭店楚簡『五行』の最も顕著な思想的特徴ではないかとして、この二つの思想の關係性を明らかにすることが改めて課題となるという。一方で、第三段目は思想的主題を見出しがたく、章節同士のまとまりにも缺け、このような特徴は郭店楚簡『五行』の編纂過程を考える上でも、一つの判断材料を提供すると述べる。

第五章『孟子』萬章下篇「金聲而玉振之」考―馬王堆漢墓帛書『五行』を手がかりに―では、『孟子』に對する朱熹の解釋をそのまま馬王堆帛書『五行』に當てはめるという従來の手法を批判し、馬王堆帛書『五行』の獨自性を認めた上で、改めて馬王堆帛書『五行』の「金聲而玉振之」の意味を探究している。さらに、馬王堆帛書『五行』における「金聲而玉振之」の句の考察をもとに、『孟子』萬章下篇の「金聲而玉振之」の句についても再検討している。そして、「金聲」「玉振」を音樂用語と見なし、「鐘を打ち鳴らして演奏を始め、玉（磬）を打ち鳴らして演奏を締め括る」とする従來の解釋に對して、「金のように、（美しい）聲を發し、玉のようにおのずから、（美しい音を）振るう」という人物の徳性を比喩した言葉であるという新たな解釋を提示している。

第六章『孟子』に見える告子の仁内義外説」では、『孟子』や『管子』などの戰國諸子文獻、および郭店楚簡『六徳』『語叢一』などの出土資料に見える「仁義内外説」を整理し、各文獻におけるそれぞれの間

題意識を探究している。従来、告子の義外説は「他律的」「強制的」であり、本性は「外在」するという思想であると見なされてきたが、著者は、この解釋は、孟子の「仁義」の思想（自律的・内在）をそのまま圖式的に反轉させたものではないかと疑っている。著者によると、告子の仁義内外説の主題は、「仁」は「私の私的な親疎の基準（「我」）に従い決まるものであり、「義」は「白さ」や「長さ」と同様、客観的で公的な尺度に従い決まることを示すことにあるとされる。そして、告子の義外説は、日常的な色に對する認識作用と年長者に對する道德的行爲とを比喻として用い、さらにその独自の「狂舉」的な説明方式（内外区分）によって「義」の客観性を論證するところに、その思想的意義があると述べている。

第七章「郭店楚簡『性自命出』の人性論とその周辺―主要概念と比喩表現の再検討―」では、郭店楚簡『性自命出』に見える「性」「心」「物」や、「善」「不善」および「物」「勢」「義」「道」といった主要概念について、これらをめぐる比喩表現や文章構造を改めて検討し、その意味内容を考察している。さらに、『性自命出』の冒頭の一文「凡人は、性有り」と雖も、心は定志無し」を全體の思想に位置づけて把握し、その周辺の關連する諸思想と比較・検討することにより、『性自命出』の人性論の思想的特徴を明らかにしている。この一文は従来、心性の未熟さを表明するものと理解されてきたが、著者はこの一文について、全篇の冒頭に置いて、宿命的な「性」の自覺を契機とした、「心」の自由さと發展の可能性とを表明するものと理解すべきではないかと提案している。すなわち、人性の未熟さや修養の必要性が表明されて

いるのではなく、「心」に「定志」がないことに意義を認め、そこに人間の發展の可能性が見出されるという理解である。そして著者は、『性自命出』の人性論は、人間を支配する必然的な因果法則に對する自覺の上に、人間の心の自由の領域に價値を認め、規範の根源と人間性に關する思索を深めるものであったと述べている。

卷末には、「參考文獻」「あとがき」「人名索引」「事項索引」を収録している。

本書は、對象文獻と真摯に向き合った上で、その特徴を明らかにしようという意識が強く表れている。本書を読むと、竹簡上に見える符號が文獻讀解の際の大きな手がかりとなり、輕視できないことを再認識できる。出土資料を研究する際には、従來の解釋に引きずられずに文獻そのものを精緻に讀み解き、その上で思想内容や思想的課題を説明するという姿勢が重要であることを改めて気づかせてくれる研究書である。

なお、本書の書評・紹介として、西山尚志（「書評」西信康著『郭店楚簡『五行』と傳世文獻』（『中國出土資料研究』第一九號、中國出土資料學會、二〇一五年三月）、椋島雅弘「新出土資料關係文獻提要（十四）」（『中國研究集刊』夜號（第六一號）、大阪大學中國學會、二〇一五年一月）などがある。（草野友子）

大野裕司著『戰國秦漢出土術數文獻の基礎的研究』（北海道大學出版會、二〇一四年六月）

出土文獻のうち、術數に關する文獻について取り上げた著作である。

著者の博士學位論文の一部を増補改訂したもので、解題篇、論文篇の二部構成となっている。

本書では、術數文獻を「占術の技術重視の書、具體的な占術の實踐法を中心に説く書」（九頁）と定義し、出土術數文獻を研究対象としている。出土術數文獻の全體像を把握するために、まず第一部でこれまでに出土した術數文獻の解題を擧げている。その目的は、「これまでの術數文獻の出土状況を把握し、如何なる文獻がどの程度出土しているかを把握する」、「これまでの各出土術數文獻の研究状況を確認し、その研究成果を術數理解に役立てる」（ともに九頁）の二點である。

解題は天文、五行、著龜、雜占、形法に分かれ、それぞれの出土状況、先行研究、概要をまとめる。出土術數文獻の研究を進める上で基礎的事項が網羅的に整理されており、有益である。解題を確認していくと、『質日』などの曆譜と、『日書』をはじめとする五行の文獻が多く出土していることがわかる。このうち擇日（日の吉凶による日選び）に關する『日書』については、第二部で著者が詳しく論じている。第二部の論考篇は、全四章から成る。

第一章「睡虎地秦簡『日書』における神靈と時の禁忌」は、睡虎地秦簡『日書』に見える日のタブー（日忌）について検討している。日の吉凶を判断する際、根據となるのが『日書』であり、『日書』はのちの通書に相當する。ある日にある行爲を禁止する場合、その背後に神靈の存在を想定することがある。神靈は人知を超えた超自然的な存在であり、星のように一定の規則に従って循環する神煞（しんさつ）、建築や土木に關わる天神、祖先・職能神など祭祀対象の神靈に大別さ

れる。このうち、天神は神煞と同じ機能を果たしている。これらの神靈に關わる日は、ある行爲を行うのに宜しくなく、またある行爲を行うのによい日とされるのである。本章では睡虎地秦簡『日書』と後世の通書とを比較し、通書には吉神（吉の神煞）と凶煞（凶の神煞）の雙方が見えるのに對し、『日書』の神煞の殆どは、後世の凶煞であるという點を明らかにしている。また、通書においては祭祀対象となる神靈が高位であるのに對し、『日書』では身近な神格の低い神靈を祭祀対象としているという。こうした後世との違いについて、『日書』には神靈に對する原始的な畏敬感が存在しており、後世の通書になると、人間の功利的な態度が見られると指摘されている。

第二章「中國古代の神煞——戰國秦漢出土術數文獻に見るもうひとつの天道觀」は、本書の中心となる議論であろう。第一章で取り上げた神靈のうち、特に神煞について検討する。神煞は擇日書だけではなく、『荀子』や『韓非子』、『淮南子』などの傳世文獻でも斷片的に認められる。『日書』に見える神煞は、後に名前がやや變化するものもあるが、後世のものと運行や宜忌が類似しており、連続性がある。本章では、第一章で検討した睡虎地秦簡以外の『日書』も網羅的に調査し、吉神に分類される存在が見いだせないことが述べられる。吉神という概念は後發のものであることがわかったのである。

こうした神煞の特徴から、著者は出土術數文獻に見える天道觀を「術數的天道觀」と名づける。傳世古代文獻は、主に儒家文獻や戰國諸子といった「帝王」のための言説という偏った内容であるため、帝王の天に對してのあるべき態度が記されている。それに對して「術數的天

道観」の特徴は、「ひとつは、天道（自然界の循環的運行規則）への随順、もうひとつは、天が人に道徳的規範を要求しないこと」（二〇二頁）にある。『日書』が中國各地で出土していることから、この天道観が広く共有された概念であったことがわかる。「術數的天道観」は、出土術數文獻の検討を通じて初めて明らかにされた概念であり、ここに出土文獻を用いた研究の重要性があるといえよう。

第三章『日書』における禹歩と五畫地の出行儀式」では、出行の際に行われたと考えられる儀式のうち、秦代の禹歩五畫地法から南宋以降の速用縦横法への流れを検討する。先行研究の多くは、『日書』の禹歩五畫地法を出行の際に必ず行うものと考えていたが、著者の検討の結果、出行の凶日に急用でどうしても出發しなければならぬ場合に行われた儀式であることが明らかとなった。

第四章「玉女反閉局法について」は、各文獻の玉女反閉局法（凶の日にやむをえず出軍する際の儀式）を比較し、校勘・解説を施している。玉女反閉局法の原型を突き詰めていくと、儀式中の禹歩は元々行われていなかったことが明らかとなる。日本の陰陽道で行われた「反閉」は、本来の玉女反閉局法が傳わり、變形したものと述べられている。

なお、本書に對する書評・紹介として、すでに椛島雅弘「新出土資料關係文獻提要（十三）」（『中国研究集刊』珠號（第五十九號）、二〇一四年十二月）、宮崎順子「大野裕司著『戰國秦漢出土術數文獻の基礎的研究』（『東方宗教』第一二五號、二〇一五年五月）、池澤優「術數文獻を用いた出土資料研究」（『東方』第四一二號、二〇一五年

六月）、佐々木聰「大野裕司『戰國秦漢出土術數文獻の基礎的研究』（『人文學論集』第三十四集、二〇一六年三月）がある。

（高橋（前原）あやの）

